豊明希望チャペル礼拝

2026／6／14

「おことばをください。」

ルカの福音書 7：1～10

ルカの福音書では、最近は、マタイの福音書の山上の垂訓(説教)に、並ぶ、いわゆる平地の垂訓(説教)について教えられてきましたが、今日の箇所は、そんな文脈の中で、あるローマの兵士百人隊長と、イエス様との出会い(結果的に出会っていませんが・・)のことについてです。百人隊長は、当時、ローマによって支配されていたユダヤにおいて、そのローマ側の兵士で、異邦人でした。

ちなみに、この絵は、その時の模様を描いたものですが、すでに聞いていただいたように、イエス様に来ていただく必要はございません。御言葉だけ下さいと、その百人隊長の主人が申しておりますと、百人隊長が友人達に伝えてくれるようにとお願いした、同じ兵士？の友人の絵です。

ちなみに、この書はルカの福音書ですが、この記事は、マタイの福音書にも同じ報告があります。それで、少し脱線しますが・・・百人隊長のことについてです。

今、ルカが書いた使徒の働きから教えられていますが、すでに学んだ使徒の働き 10 章で、やはり百人隊長が出てきました。コルネリウスという人で、この人は海沿いのカエサリアの百人隊長で、ペテロが派遣されて、ペテロらから洗礼を受けた人です。今日触れられているのは、ガリラヤ湖の北、カペナウムの百人隊長です。

ちなみに、最近は、はやりの AI のおかげでずいぶんと、聖書についても調べ物が便利になりました。AI で、聖書の百人隊長と尋ねると、この二人の他、イエス様が最後に十字架につかれて、その最期を見た、刑場の百人隊長が、今日の百人隊長ではありませんが、「この方は本当に神の子であった」あるいは「この人は本当に正しい人であった」(ルカ 23：47)と言ったと言われる人もいると 3 人の名があげられて、牧師の説教によっては、今日のこのカペナウムでの百人隊長は、この十字架の下で警備していて、イエス様を神の子と告白した百人隊長ではないかと、牧師達は想像するが、それを示す根拠はないと、AI が言ってくれています・・(今、牧師に聞くより、AI に聞

く方が早いですね・・てか、牧師も聞いているわけですから・・)

ただ、ここからは、牧師しか言えないことだと思いますが、少なくともルカは、この記事を通して、何を伝えようとしているかと言うことです。というのは、十字架の下の百人隊長の記事はルカの福音書にもあるわけですが、多くの牧師が言うとおり、同一人物でないにしても、これら百人隊長たち、すなわち最初に言いましたように、異邦人二人に触れることによって、また、使徒の働きが、いわゆる異邦人伝道の経緯を伝える書でもあることを思うとき、「異邦人(ユダヤ人にとって外国人：私たちと同じ)」にも、信仰が生まれること、そして、福音は異邦人にも伝えられ、異邦人でも、世界中の人たちが等しく、この福音によって救われるチャンスがあることを伝えている、あるいは、読者よ悟れと、促していること、そのことを、想像することは大事な事だろうと思うのです。特に、そういうわけで、この、**①カペナウムの百人隊長、②十字架の百人隊長、③カイサリアの百人隊長（コルネリオ）**の、主を信じている、あるいは少なくとも信仰を求めている三人に言及しているのは、ルカだけですから。

ちょうど、使徒の働きからも教えられていますから、あえて並べてみました。

並べついでに、今日の結論めいたことをお話ししておくと、先週、私たちは、使徒の働き 13 章 44 節からの記事で、御言葉の力が強調されていると教えられました。今週、この箇所を開くにあたり、申し訳ない・・ややこしいことを言いますが・・同じく、ルカによって、御言葉の力が強調されているという点において、ある意味、教えられている中心は、イエス様の言葉、あるいは御言葉の力の大きさ、不思議、それが強調されている、教えられていることを思うのです。色々言ってきましたが、そんなことを念頭に起き、今一度、この箇所で何が起きているのかを、御言葉を追って見ていきます。まず話しのきっかけはこうです。

「**7:1 イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた。7:2 時に、ある百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていた。7:3 百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。7:4 イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。7:5 私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」**」

このあとのところを含めて、今日の箇所は、三者の人の評価が、重なり合って、並べられています。まず一つ目は、ユダヤ人の百人隊長の対するもので、彼がいい人なので、会堂をたててくれるような功労者なのでという、4 節の、「**この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。**」という評価です。

二つ目は、これは、6 節以下の内容になりますが、百人隊長のイエス様に対するもので、私は、百人隊長で、下の兵士に命令してそれを実行してもらう立場だから、**イエス様なら、御言葉一つで、自分の僕の病気は治していただける**でしょうと、イエス・キリストというお方を、言葉一つで、しかも遠隔地からであっても、人を癒される人だと高く評価した、その評価です。

そして最後の三つ目は、イエス様の、この百人隊長に対する評価です。すなわち、「7:9 **イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」**」という評価です。

この点で、掘り下げるのも一つの大きく教えられることだと思いますが(「人の評価と神の評価」等々)、まずは、異邦人が、すなわち、私たちが、信仰によってこそ、信仰によってのみ、どんなに遠隔地にあっても、地球の反対側の日本に住む私たちであっても・・・御言葉の力は及ぶと言うこと、それは、先週、使徒の働きでも教えられた通りですが(最初に触れた・・)、異邦人の救い、そして、イエス様に直接お目にかかれないような、使徒の働きに出てくる、イエス様がすでに目の前にいない時代の救い、イエス様がいなくても、御言葉さえあずかれば、その御言葉に力があること、やはり、そのところに、今日の箇所のルカの強調点が一番あるように思いますので、その点を、残りの時間黙想していきたいと思います。

さて、先ほど読んだ前半部分ですが、異邦人のローマ兵でありながら、彼にとっても占領地の人民の一人に、自分の隊のおそらく一人の人間の癒やしをお願いするというところに、すでに、信仰の目覚めがあったように思います。彼は、ガリラヤ担当の百人隊長として、それは、役目上、イエス様をよく観察していたと思います。そして、達した結論が、イエス様は、悪人じゃない、問題人物ではないという評価以上に、ただものでないこと、いや、神に遣わされた人がいるなら、この人だと、ある意味では、一番客観的な眼で、判断したと言うことです。

それで、ユダヤ人に相談したようです。イエス様にお願いできないだろうかと。家の長老を送って、助けを乞いました。人望のあった人でしたから、ユダヤ人も喜んで、イエス様に取り次いだというわけです。

さて、後半を見ましょう。いままでに、見たこともなかったような、いわゆる遠隔癒やしの部分です。

「**7:6 そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。7:7 ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。7:8 と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」**」

百人隊長は、ユダヤ人にお願いしたものの、彼の評価では、ユダヤ人だとしても、最高のユダヤ人、いや異邦人の中でも見たこともない、ローマでもお目にかかったことのないような存在の人だと感じていて、十字架の下の百人隊長同様、「本当にこの方は正しい人」いや、ルカによれば、あの隊長は、正しい人だとは言ったが、この隊長は、屋根の下に、一緒に入るような人ではない、神であると、マタイ

の言うように、「この方は本当に神の子である」(「あった」マタイ 27：54)と認めざるをえないそんな方だと告白したと言うことです。

まさに、異邦人も、このように、信仰が持てる、救われる可能性があることを示した例となったわけです。イエス様の評価と最後までを読みます。

「7:9 イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」7:10 使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。7:11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った。」

異邦人の信仰をイエス様が認めたと言うことは、パウロが異邦人伝道を進める上での、異邦人でも救われる、神の子になれるという事の根拠となったでありましょう。ルカも、この点に目を留めて、ここを記録していると、最初に言ったとおりです。そして、今一度、強調すると、イエス様に触れたことも見たこともない、世界中の人たちが救われること、このように、御言葉を頂ければ癒される、そのくらい、イエス様の言葉、あるいは、御言葉には力がある。異邦人よ救われよ。世界の人たちよ救われよ。神の言葉は貴方を救う事が出来る、その福音の出来事であったと言うことです。さて、終わりますが、先週、鳥羽宣教師についてお話ししました。またある兄弟は、奥様が存命であること、召天された日を調べて教えてくれました。お二人のご長男が、大学時代に同じ大学で、知り合いであったことも教えていただきました。

あらためて、ウィクリフのホームページを見ますと、奥様の手記が、2025 年に載せられていました。先生が、ロサンゼルスで学んでいたときに、あなたは私と結婚すべきだと求められた経緯、先生が、古文書などを蒐集(しゅうしゅう)すること、姉妹によれば収集癖があったこと。それが功を奏してか、御言葉の翻訳に、この言葉を訳せた！と嬉々として、御言葉に聞き、御言葉に伝える事に没頭されたこと。そして、S 兄が学友であった、その地に夫婦で出かけたときは、その長男が生まれたば

かりで、すなわち「1970 年 2 月初旬、私たちは生後 2 ヶ月になろうとしていた息子のサムエルを連れて」宣教地に行かれたこと。その地では、先生より先に、すでに遣わされていた二人の宣教師が、当地で次々と亡くなられたこと。

今現在、住んでいる長野県の池田の地(←池田町)のように、ネパールの地が、いやそれ以上に、5000 メートル級の山々の囲まれた地で、しかし、そんな地で、40 年以上、御言葉に仕え、御言葉をこそ、当地の、特にカリン語を話す人たちに伝えることにいかに熱心であったのかを読むことが出来ました。

御言葉さえ語られれば、主の御言葉さえあれば人は救われる。遠隔地でも、異邦人の地でも、時代を超えて、地の果てであったとしても。今日はそのことを教えられたのです。鳥羽先生が信じた、御言葉の力。このカペナウムの百人隊長が信じた、「御言葉さえいただければ」癒される、救われる、その御言葉の力について、今週も教えられたのだと思います。

今一度、この百人隊長が確信し、イエス様が、その信仰をこそ誉めた、イエス様の言葉、あるいは御言葉に対する信頼、そのところを読みたいと思います。

「7:7～8・・ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。・・『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。・・」

そんな確かなイエス様とその救いをいただき、御言葉に聞き、御言葉に支えられ、御言葉をこそ伝える証しの歩みを、この週もここから始めましょう。